

## 中国ムスリムの五倫言説における夫婦観

——中国の伝統的五倫との比較からみた——

佐 藤 実

前近代の中国において、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の5つの人倫関係を説く五倫概念が伝統的にあるが、五倫を専論する『小学』や『五倫書』では君臣と父子にたいする記述が圧倒的に多く、それにたいして夫婦関係については『礼記』にみえる婚礼に関する記述と、夫唱婦随などが説かれるにすぎなかった。一方、清初期に生きた劉智の『天方典礼』をはじめ明末清初期のムスリムが著したイスラーム哲理書においても五倫という概念が使われるのだが、そこでは夫婦関係を五倫の先頭におくものが散見される。その根拠となるのが、人間は男女の夫婦関係から生じるという自然学的生成論的観点である。夫婦関係を重視する思想自体は、『周易』以来、中国の伝統的な自然観でもあるが、「夫婦→父子→君臣→兄弟→朋友」という順序も関係性も「天理流行」つまり、本来的に定められた、そうしなければならない事柄であるとする『天方典礼』による五倫の説明に朱熹言説が伏流するさまがみてとれる。

### はじめに

劉智（1660年頃－1730年頃）が著した『天方典礼』はムスリムが日々実践すべき儀礼についてまとめて説明した書であるが、そのなかに5つの人倫関係いわゆる五倫のあるべきかたちを説く章がある。五倫そのものについては周知のように「君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信」であり、以下にみるように『孟子』は「父子、君臣……」の順序で列挙するのにたいし、『中庸』は「君臣、父子……」と『孟子』とは先の2つの順番がひっくりかえる。後世、中国ではこの『孟子』と『中庸』のいずれかの順序で言及されるわけだが、3番目の夫婦以降の順序はわからない。ところが『天方典礼』では夫婦が筆頭にきて、父子、君臣、兄弟、朋友となっている。列挙される順序はただ単に並べられているわけではない。その意義について検討することを最終目的とするが、本稿ではまず中国の伝統的な五倫がどのように語られてきたのかについて整理、検討したうえで、『天方典礼』の五倫言説の基本的な方向性を確認することにする。

## 1. 五倫の中国的伝統

### 1-1 五典から五倫へ

まず中国の伝統における五倫について確認しておく。こんにち五倫と呼び習わされているものは『尚書』（いわゆる『書経』）堯典の、「堯が舜に命じて五典を丁寧に広めさせたところ、人びとはしっかりと五典を実践するようになった」（慎徽五典，五典克従）の五典が何を指すのかという文脈で登場する。この時点で五倫という呼称はない。『尚書』の古注とされる孔安国伝によれば、この文章は『春秋左氏伝』文公十八年にいう「舜は堯の臣下となり、……八元の子孫を推挙して五教つまり、父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝を四方の人びとに広めさせると、国の内外ともに安らいだ」（舜臣堯，……舉八元，使布五教于四方，父義，母慈，兄友，弟共，子孝，内平，外成）のことを指していて、『尚書』の五典とはこの『左伝』の五教「父義，母慈，兄友，弟共，子孝」であるとする。これが古注の立場であり、五典を家族の構成員の正しいありかたとみる。一方、宋代以降に作られた蔡沈（1167年－1230年）の新注によれば、五典とは『孟子』滕文公上の、

人之有道也，飽食，煖衣，逸居而無教，則近於禽獸。聖人有憂之，使契為司徒，教以人倫。父子有親，君臣有義，夫婦有別，長幼有序，朋友有信。

人というのは、食べ物が充分で、暖かい服があり、安逸できる住居があっても教えがなければ禽獸と同じようなものだ。そこで聖人はこのことを心配して契を司徒に任命して人倫を教えさせた。つまり父子の間には親愛，君臣の間には正義，夫婦の間には区別，長幼の間には序列，朋友の間には信頼を教えさせた。

の「父子有親，君臣有義，夫婦有別，長幼有序，朋友有信」であるとする。蔡沈は朱熹（1130年－1200年）の晩年の高弟であり、蔡沈の著した『尚書』の注釈である『書集伝』は後世、科挙のテキストに採用され重視されるとともに、まとまったかたちで『尚書』の注釈書を著さなかった朱熹の『尚書』解釈をうかがい知ることができる資料<sup>1)</sup>としても影響を与えた。この五典にたいする解釈についていえば、実際に朱熹も『中庸章句』20章において、『中庸』の本文

天下之達道五，所以行之者三。曰君臣也，父子也，夫婦也，昆弟也，朋友之交也。五者天下之達道也。知，仁，勇三者，天下之達德也。……

1) 『書集伝』序には「堯典」「舜典」「皋陶謨」「大禹謨」に朱熹の校閲を受けたとある。

天下において人びとが行くべき道は五つあり、そのために必要な徳は三つある。五つというのは君臣の間の道、父子の間の道、夫婦の間の道、兄弟の間の道、友人との間の道である。この五つが天下の達道である。そして知、仁、勇の三つが天下の達徳である。  
……

に対して、「達道者、天下古今所共由之路、即書所謂五典。……（達道とはいずれの場所でも、いずれの時代であっても誰もが通っていく道のことで、『尚書』にいう五典のことである。……）」と『尚書』の五典が「君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友之交也」であるとしている。『孟子』『中庸』いずれも家族間の関係に君臣関係を加えた上で、『孟子』は「父子、君臣……」、『中庸』は「君臣、父子……」としたのである。

以上、『尚書』の堯典にみえる五典をめぐる『左伝』の五教であるとする説と、『孟子』『中庸』の『中庸』でいえば五達道であるとする説があったわけだが、朱熹の影響もあって『孟子』『中庸』の君臣、父子、夫婦、長幼（『中庸』では昆弟。いずれも兄弟の意）、朋友が五典と認識されていく。

この五典の内容が五倫と呼ばれるようになるのは時代がさらにくだって明代にはいつてからである。沈易『五倫詩』（『幼学日誦五倫詩選』洪武12（1379）年錢惟善序）がその最初とされる。書名の「幼学」とあることからわかるように初学者の啓蒙書として、歴代の詩から五倫それぞれについて詠ったものを選び出して、五倫ごとにまとめたものである。また明の宣宗と朱瞻基が『五倫書』（正統12（1447）年英宗序）を著して、流行をみている。本書は五倫それぞれについての言説を古典からの抜粋のみで構成するというスタイルであり、類書のような形式である。いずれも著者の思想が直接に語られるのではなく、古典の引用という編纂形式を通じて五倫の内包と外延を明らかにしようとするものである。

こうした古典の引用によって五倫を説明する先蹤となったのが、朱熹が編纂してひろく読まれた『小学』である。そしてその『小学』の内篇におさめられた明倫篇の「明父子之親」「明君臣之義」「明夫婦之別」「明長幼之序」「明朋友之交」が後世の五倫を決定づけたとされる<sup>2)</sup>。そこでつぎに『小学』と、その影響をうけた『五倫詩』『五倫書』について概観しておく。

## 1-2 『小学』『五倫詩』『五倫書』について

『小学』は大きく内篇と外篇にわかれる。基礎となる内篇は立教篇、明倫篇、敬身篇そし

2) 尾崎雄二郎、竺沙雅章、戸川芳郎編（2013）『中国文化史大事典』大修館書店、「五倫」項（中島隆博担当）を参照。

て稽古篇の4篇で構成されるが、そのうち「立教」篇、「明倫」篇、「敬身」篇の3つが『小学』のテーマとなる。稽古篇はこれら立教（教えの本質論）、明倫（五倫について）、敬身（居敬について）をそれぞれ実践した古人の例。さらに外篇の嘉言篇と善行篇は立教、明倫、敬身それぞれについて、宋代を中心とした後世の人びとが語った戒めとした言葉（嘉言篇）とその実例（善行篇）となる。

本論の関心事である五倫はもちろん明倫篇とかかわる。朱熹は「明倫」について、明倫篇の冒頭で『孟子』滕文公上を引用しつつ、以下のようにいう。

孟子曰、設為庠、序、学、校、以教之。皆所以明人倫也。稽聖經、訂賢伝、述此篇、以訓蒙士。

『孟子』は、（夏殷周の三代には）庠、序、学、校などを設けて人々に教えた、これらの学校ではいずれも「人倫」を明らかにする場所である、という。聖人の経典（聖經）を読み、賢者が伝えたものを参訂し、この篇をつくった。若い人々に教えるためである。

「明倫」は『孟子』の「人倫を明らかにす」からとったものであるが、この「人倫」とは先に引用した同じく『孟子』滕文公上の「教以人倫。父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信」のことを指す。この明倫篇冒頭で留意したいのは、『孟子』引用後の朱熹じしんのことは「稽聖經、訂賢伝」である。あとで言及するが、『天方典礼』五典篇もこの句をふまえる。

さて、『小学』明倫篇は「父子の親を明らかにす（明父子之親）」からはじまる。『孟子』系の並び方である。つづいて「明君臣之義」「明夫婦之別」「明長幼之序」「明朋友之交」と五倫それぞれの意味内容を説明していき、最後に「通論」でおわる。全部で108条あるが、そのうちわけは以下のとおりである。

明父子之親：39条（第1条－第39条）

明君臣之義：20条（第40条－第59条）

明夫婦之別：9条（第60条－第68条）

明長幼之序：20条（第69条－第88条）

明朋友之交：11条（第89条－第99条）

通論：9条（第100条－第108条）

「明夫婦之別」がもっとも少ないことがわかる。全体の8%ほど。いっぽう同じ内篇で、古典からの実例をあげた稽古篇では、

父子：17条

君臣：5条

夫婦：4条

兄弟：2条

朋友：3条

となっている。父子とくに子の親にたいする孝を主題にしたものが圧倒的多数を占めている。夫婦は11%ほどだが、君臣、兄弟、朋友と数としては大差がない。

これが同時代の文献から収集した外篇の嘉言篇になると明倫の全41条のうち、

父子：14条

君臣：10条

夫婦：8条

長幼：4条

朋友：3条

通論：2条

となり、五倫の順番にしたがって少なくなっている。夫婦についていえば20%弱の割合。外篇のもうひとつの善行篇では、明倫は全部で46条あるが、第35条以降が五倫では分類しにくいので、第34条までについて数えあげると、

父子：10条

君臣：8条

夫婦：5条

兄弟：10条

朋友：1条

となり、夫婦は全体の14%ほど。

以上、いずれの篇においても分量的に重点がおかれているのは父子関係であることは動かない。これは孝観念の重視ということになる。朱熹は孝概念について、その分析については理や気あるいは性などに比べて関心が薄かったといわれる<sup>3)</sup>。ただし初学者にたいする啓蒙という側面からはやはり孝概念は欠くべからざるものとして意識されていたにちがいない。次いで、ばらつきはあるものの君臣がきて、さらに兄弟につづくといえようか。夫婦と朋友の記述は少なく、五倫と一口にいても関心に軽重があることがわかる。

あまり注視されていないように思われる夫婦と朋友だが、その定義ともいえる内篇の明倫篇においてもっとも薄い記述であるのが「夫婦之別」であることは、本論のテーマからいえば興味ぶかい。しかも全9条のうち、前半の5つは『儀礼』と『礼記』からの婚礼に関する

3) 緒方賢一(2014)『中国近世士大夫の日常倫理』中国文庫、第3部第2章「朱熹と『孝経刊誤』」240-241ページを参照。

文章であり、夫婦のありかたといったことは全く言及されない。これは夫婦関係の確立が婚礼によって決定づけられるためであるとかんがえられる。また後半は『礼記』内則篇の「男子は外に居り、女子は内に居る」を筆頭に「男は内を言わず、女は外を言わず」と徹底的な男女の役割分担、まさに「夫婦之別」を説くものといえる。そして「孔子曰く、婦人は人に伏すなり。是の故に専制の義無く、三従の道有り。家に在りては父に従い、人に適くには夫に従い、夫死ねば子に従う。敢えて自ら遂ぐる所無し」<sup>4)</sup>といった悪名高き「三従」など、女性の自由を完全になみする引用がつづき、最後に『礼記』曲礼篇の「寡婦の子は、焉に見ること有るに非ざるは、与に友と為らず」と、みるべき点は何もない（非有見焉）のであれば友になってはいけない、と結ぶ。以上、われわれの目からみれば取るべきところがほとんどない内容になっている。とりわけ、宇野精一氏も指摘するように「夫と婦との求愛を基礎とする説明は全く見られない」<sup>5)</sup>のである。

それにたいして、明初になった沈易の『五倫詩』は漢代以来の詩を父子類、君臣類、夫婦類、兄弟類、朋友類の5類に分類して、それぞれ1巻ずつにまとめている。『五倫詩』も順列でいえば『孟子』系である。分量でいえば五倫いずれもほぼ同じである。夫婦類をみてみると、『文選』所収の詩をはじめ、李白、杜甫、孟浩然、白居易、文天祥、趙孟頫といった人々の詩を都合58首ほど掲載している<sup>6)</sup>。その内容は、たとえば杜甫の「月夜」のように安祿山の叛乱のために離別せざるをえなくなってしまった妻への思いを詠ったものや、夫と死別した未亡人が再婚をせずに貞節を守ることを詠った節婦詩と呼ばれるジャンルの詩が大半を占める。たしかに夫婦間の人間的な感情が主題となっている点は『小学』とは比較しようがないほどであり、詩の詩たる所以をそこに見いだすことができる。ただし、別離の情を詠ったものが多いことについては、そうしたケースが多々生じたことを差し引いたとしても、限定的な状況下におけるものであり、『幼学日誦五倫詩選』という正式なタイトルを思うとき、違和感は否めない。また節婦詩については、『列女伝』などにも収録されているおなじみのものであることが確認できる。そうしたなかにあって、白居易の「贈内」は印象的である。たとえ困窮した生活となったとしても変わらない夫婦関係を願ひ「庶わくは貧と素とを保ち、偕に老い同に欣欣たらんことを」と締めくくる。

最後に朱瞻基の『五倫書』をみる<sup>7)</sup>。本書は君道、臣道、父道、子道、夫婦之道、兄弟之

4) 宇野精一（1965）『小学』（新釈漢文大系），明治書院，によると，当該箇所は、『大戴礼』からの引用であるが，原文には「孔子曰」という三字はなく，朱熹が權威付けのために意図的に付けくわえた指摘したうえで「感心しない」という。確かにそうである。

5) 同書，107ページ。

6) 使用したテキストは『四庫存目叢書』集部総集類第290冊所収，南京図書館蔵明洪武刻本。

7) 使用したテキストは『統集四庫全書』子部935冊，936冊所収，首都図書館蔵明正統12年内府刻本。

道、朋友之道、の7つの篇にわかれる。そして各篇は『小学』にもみられた「嘉言」と「善行」からなるが、後者の「善行」が中心となっていて、明代にいたるまでの歴代の「善行」とされる逸話が収録されている。篇名からわかるように、君臣が君と臣に、父子が父と子に細分化されていて、君臣と父子が重視されている。順序でいうならば、『小学』や『五倫詩』では父子、君臣とならんでいたが、『五倫書』は逆になっていて、『中庸』系の君臣関係が先にきている。分量的にも全62巻中、巻1の「五倫総論」を除くと以下のようになっている。

君道：22巻（巻2－巻23）

臣道：30巻（巻24－巻53）

父道：2巻（巻54－巻55）

子道：3巻（巻56－巻58）

夫婦之道：1巻（巻59）

兄弟之道：1巻（巻60）

朋友之道：2巻（巻61－巻62）

圧倒的に君道篇と臣道篇の分量が多く、五倫の序列ともあわせて、君臣関係を重視した構成になっていることはあきらかである。それに比して夫婦之道篇は兄弟之道篇とともに1巻分しかない。では、その夫婦之道篇の内容はどのような特徴があるのか。

まず夫婦之道をまとめて「嘉言」があり、『周易』『詩経』『礼記』『孟子』の経書からそれぞれいくつかの文章と、前漢の王吉、隋の王通、宋代の司馬光、真徳秀の言葉が引用されている。いくつかみてみると、『周易』は恒卦の六五の爻辞「其の徳を恒にす。貞し。婦人は吉、夫子は凶」とその小象「象に曰く、婦人貞しくして吉なるは、一に従いて終わればなり。夫子は義を制するに、婦に従えば凶なり」を筆頭に、家人の彖伝、六二の爻辞、そして序卦伝の恒卦の説明など、夫唱婦随であるべきことを説く。『礼記』は『小学』が引用する郊特牲篇と内則篇の文章に加えて昏義篇の「婦順とは舅姑に順、室人に順、而して後に夫に当たる。以て絲麻布帛の事を成し、以て委積蓋藏を審守す。是の故に婦順備わりて後、内、和理し、〔内、和理して〕後、家、長久す可きなり。故に聖王、之れを重んず」などを引用する。婦が舅と姑、そして家の人々にも柔順に相対したうえで夫に接すること、婦の順徳があつて家が調和し、永らえることを説く。『孟子』は滕文公下の「男子<sup>8)</sup>生まれて之れが為に室（妻を指す）有ることを願ひ、女子生まれて之れが為に家（夫を指す）有るを願う」が引用されている。これらは『小学』明倫篇の主旨と大きくかわらない<sup>9)</sup>。

8) 「男子」、『孟子』原文は「丈夫」に作る。

9) 王吉以下の言葉はつぎのとおり。「王吉曰く、夫婦は人倫の大綱なり」（『漢書』王吉伝）、「王通曰く、古は男女の族、各おの徳を択び、財を以て礼と為さず」（王通王通『文中子』事君篇）、「司



目を引くのは、『詩経』から引用された夫婦関係を詠う9篇の詩（国風が周南・関雎，周南・葛覃，周南・桃夭，召南・采芣，召南・采蘋，邶風・谷風，鄭風・女曰鷄鳴，齊風・鷄鳴の8篇，小雅が鴻鴈之什・斯干の1篇）である。一般的にいて、『詩経』のイメージとして、「恋愛詩」や夫婦の仲睦まじさを称揚する詩がある。しかし本論の立場から読みなおしてみると，引用された詩はいずれも夫にとって良いとされる婦を称えている印象が強い。たとえば『詩経』劈頭をかざる関雎からは，

窈窕たる淑女は 君子の好き速（おしとやかなよい娘は，君子のよいつれあい）

の句が引用されているし，また周南・桃夭からは，

この子 子<sup>ゆ</sup>き<sup>とつ</sup>婦がば 其の室家に宜ろし（この子がお嫁に行けば，相手方の家にきっとあうはずだ）

が引用されている。窈窕とした，あるいはわかい桃にたとえられた娘と婦とするにふさわしいことを云々した詩である。ちなみに吉川幸次郎（1985）『詩経国風』（中国詩人選集）岩波書店，によれば周南・関雎は「領主のために幸福な結婚をいのる歌」，周南・葛覃は「既に嫁にいった若妻が，里帰りしようとする時の歌」，以下それぞれ周南・桃夭「桃の若木から発想して，結婚しようとする少女を祝福する歌」，召南・采芣「君主の夫人が，夫の先祖の祭りを，けなげに手つだうのを，たたえる歌」，召南・采蘋「祭祀を敬虔に行う若い女性をたたえた歌」，鄭風・女曰鷄鳴「なかのよい夫婦の歌。妻が夫の友だちをよくもてなすのをうたった」，齊風・鷄鳴「朝寝をしたがる夫をおこす賢いきさきをほめる歌」であるとされている。いずれも夫を支える婦人を称えるものである。小雅からの引用である鴻鴈之什・斯干は，男子が生まれたらベッドの上に寝かせるが，女の子が生まれたら地べたに転がせておく，という内容の締めくくりの句，

非無く儀無く 唯だ酒食<sup>はか</sup>是れ議るのみ（女は物事の是非も関係がなく，ただ食事のみに気をつかい）

父母に懼<sup>うれ</sup>いを<sup>のこ</sup>諭すこと無かれ（夫の父母に対して心配をかけてはいけない）

---

馬光曰く，婦とは家の由りて盛衰する所なり」（朱熹『朱文公家礼』巻3），「真徳秀曰く，夫の道は敬身して以て其の婦を帥いるに在り。婦の道は敬身して以て其の夫を承くるに在り。故に父の子に醜するに必ず曰く，勉めて帥いるに敬を以てせよと。女を送るに必ず曰く，之れを敬し，之れを戒めと。夫婦の道，此ここに尽く」（真徳秀『西山読書記』巻13）。



が引かれている。

そのなかで唯一、邶風・谷風が妻の夫にたいする思いを述べたものである。吉川氏は「棄てられた妻が、むかし夫と共かせぎしたときの苦労をのべたてて、新しい妻と仲よくしている夫をうらむ歌」と評されているが、実際に『五倫書』が引用する部分はその第1スタンザで、離縁された妻が元夫との関係を悔いる内容である。

習習たる谷風（やわらかく吹く谷風）  
 以て陰り、以て雨ふる（曇ったり、雨が降ったり）  
 黽勉して心と同じくすれば（二人の心をつとめて同じくすれば）  
 宜しく怒有るべからず（怒ることなどなかったはずなのに）  
 葑を采り、菲を采り（カブや大根を抜くのに）  
 下体を以てする無かれ（下の根っこだけを見てはいけない）  
 德音違ふこと莫ければ（思いやりのことばに行き違いがなければ）  
 爾と同じに死なん（あなたと死に遂げられたでしょうに）

「黽勉同心、不宜有怒」「德音莫違、及爾同死」とあるように夫婦が「同心」であること、「德音」を交わしあうことが、夫婦間に必要な心のもちようであることを指摘している点は確認しておきたい。しかも他の引用例がすべて女性を話題にしているのにたいし、ここでは話者が女性であるとはいえ、相手の男性の感情もあわせて問題にしていることも重要であろう。『五倫詩』でも白居易の詩にほのみえたように、詩という表現スタイルによって辛うじて人間としての夫婦のあいだの感情のひだが叙述されていることがわかる。逆にいえば経書といった古典のなかにはそうしたものを見いだすことがなかなか難しいということになる。

「嘉言」につづく「善行」についても簡単に言及しておくが、婦人については儒家的伝統的な理想を説くエピソードがほとんどであるのにたいして、夫についてあげられているもので目につくのは、病などによって失明したり、話すことが困難な女性を、それにもかかわらず積極的に娶る男性の話柄である。婚約した以上、相手がどういう状態であれその婚約を全うするという、美談といえ美談かもしれないが、婚約という社会制度を全うしただけにすぎないともいえる。しかし、ただ単純に男女の関係ではなく、「夫婦」という社会的関係を問題にする際には重要であるのかもしれない。

## 2. 劉智『天方典礼』の五倫

これまで中国の伝統的な五倫における夫婦関係の語られかたをみてきた。五倫全体からいうと、君臣や父子関係にくらべて注目度は低く、兄弟、朋友とくらべても注視されている

とはいいがたい。またそのなかにあって夫婦関係は夫唱婦随のかんがえかたが貫かれ、妻は夫にたいして順であるかつ従であることが説かれてきた。以上をふまえて、清初に生きたムスリム劉智の『天方典礼』を中心に、近代ムスリムが構想していた夫婦関係をおさえてみたい。まず五倫の順序から確認していく。

## 2-1 五倫の順序

『天方典礼』巻1・原教には「敬服五功，天道尽矣。敦崇五典，人道尽矣」とあり，その五典についてつぎのような注がついている。

五典，即君臣，父子，夫婦，昆弟，朋友五倫之教也。天方又謂「五成」。蓋君臣成其國。父子成其家。夫婦成其室。昆弟成其事。朋友成其德者也，皆有当然不易之禮。五典修完，而人道尽矣。

五典とは君臣，父子，夫婦，昆弟，朋友の五倫に教えることである。天方では五成ともいう。おもうに君臣によって国ができ，父子によって家ができ，夫婦によって（家のなかに）室ができ，長幼によって職務がつとまり，朋友によって徳ができる。これらはいずれも，まさにそうすべきであり，変わることはない礼である。五典を修めおえれば，人の道が完成する。

君臣関係が筆頭に置かれた『中庸』系の並び方になっている。五功（イスラームでいう信仰告白，礼拝，喜捨，断食，巡礼のいわゆる五行）と五典が対になっていて，五功＝天道，五典＝人道という配当になっている。「父子成其家。夫婦成其室」と家と室が区別されているが，家のほうは族譜につらなる外延として家，室はその家に内包された内側からみたときの家ということであろうか。この五倫の定義をうけて五倫について専論する巻10・五典の冒頭でもつぎのようにいう。

五典者，乃君臣，父子，夫婦，昆弟，朋友之常經。為天理当然之則，一定不移之礼也。五典とは，つまり君臣，父子，夫婦，昆弟，朋友のあいだの常に変わらない道である。天理で，まさにそうすべき準則であり，一定不変の礼である。

「天理当然之則，一定不移之礼」は巻1・原教の「当然不易之礼」をうけてパラフレーズしたもの。この巻10冒頭の文章は，朱熹『大学或問』の29節の以下の文章をふまえる。『大学或問』29節は『大学』の「格物致知」について説明する箇所ので，木下鉄矢（2013）『朱子学』（講談社選書メチエ）講談社，の訳（161-163ページ）をつけておく<sup>10)</sup>。

天道流行，造化發育，凡有声色貌象而盈於天地之間者，皆物也。既有是物，則其所以為是物者，莫不各有當然之則而自不容已。是皆得於天之所賦，而非人之所能為也。今且以其至切而近者言之，則心之為物，實主於身。……次而及於身之所具，則有口鼻耳目四肢之用。又次而及於身之所接，則有君臣・父子・夫婦・長幼・朋友之常。是皆必有當然之則而自不容已，所謂理也。

天道が流行し，造化・發育する。およそ声・色・貌・象があつて，天地の間に盈ちている者はすべてコトである。すでにこの，と指させるコトがあれば，それがまさにこの，と指させるコトとなっているその根として，すべて例外なく，そのそれぞれに当然の則（まさにそうすべき準則）があり，人の心に具わっていて，自身ではその準則に沿ってわが身が動き出すのをどうすることも出来ない。これこそすべて，天が賦えたものを得た，自分の根に据え換えたものであり，人が為ることの出来るものではないのである。いままずはコトのうちでもわれに至切にして至近のものから取り上げるなら，すなわち心となるが，さてその心とはどのようなコトかというと，実にわが身を主導している。……心に次いでわが身に具わるものに及べば，口・鼻・耳・目・四肢の現す働きがある。さらに次いでわが身が立ち交わるものに及べば，君臣・父子・夫婦・長幼・朋友という古今の不変の行動の領野がある。これらにはそれぞれすべてに必ず当然の則（まさにそうすべき準則）があり，自身ではその準則に沿ってわが身が動き出すのをどうすることも出来ない。この当然の則こそいわゆる「理」である。

五倫とは，人の心にそなわっていて，まさにそうすべき準則，宋学の伝統でいうところの「理」として捉えられている。『天方典礼』もその文脈で五倫を把握していることになる。『大学或問』の「君臣・父子・夫婦・長幼・朋友之常」も『天方典礼』の「君臣，父子，夫婦，昆弟，朋友之常経」と通じる。

朱熹とのつながりでいえば、『天方典礼』は「為天理当然之則，一定不移之礼也」につなげて，巻10から巻13までの五典篇の構成を「篇分八章，前有総綱。每章後引主論，聖言数條，以証本章之義」と説明する。全部で8章にわけて，先頭に「総綱」をおく。各章には「主論」と「聖言」を引用する。「主論」はクルアーン，「聖言」はハディースであろう。そうすると，朱熹が『小学』明倫篇の冒頭で述べた「稽聖經，訂賢伝，述此篇，以訓蒙士」の「聖經」と「賢伝」との記述とかかわる。

10) 読みやすさの便をはかるため（ ）は省略した。また木下氏は朱熹の「物猶事也」という訓詁を重視し，「格物致知」の「物」は日本語の「モノ」ではなく，「事（コト）」で読むべきであるとしている。同書では戦略上「物」字のまま「コト」と訳出していないが，ここでは「物」字を「コト」におきかえた。

さて、その五典篇の構成だが、これまで「君臣、父子、夫婦、昆弟、朋友」の順に述べていたのが、実際には

卷10：夫道 婦道

卷11：父道 子道

卷12：君道 臣道

卷13：兄弟之道 朋友之道

と「夫婦、父子、君臣、兄弟、朋友」の順に変わっているのである。夫婦が先頭に来て、父子がそれに続く。この順番を『天方典礼』はどのようにかんがえているのか。卷10の総綱はつぎのように説明をはじめの。

有天地而後万物生，有男女而後人類出，故夫婦為人道之首也。

天地ができてからのちに万物が生まれ，男女ができてからのちに人の類が出る。したがって夫婦が人の道の最初なのである。

つまり社会価値的に順列をつけていくのではなく，自然発生的な順序にもとづいた列挙のしかたなのである。その根拠は，人祖アダムからエヴァが生まれ，アダムとエヴァから人類が生まれたというイスラームの伝承である。上の引用の注には，

天地生物之本，男女生人之本。男女之最初繼主而立極者，阿丹也。阿丹，天下万世人之元祖也。腋生好娃，配為夫婦。故夫婦原出一體，生齒繁衍，互為配偶。

天地は物を生む本源であり，男女は人を生む本源である。男女の最初は主をついで極を立てた者，アーダム（アダム）である。アダムは天下万世にわたって人の元祖である。そのアダムの腋からハウアー（エヴァ）が生まれて，夫婦となった。だから夫婦はもともとは一つの本体であり，そこから人が盛んに増えていき，たがいにペアになったのである。

とある。同様の主張は劉智の前の世代になるムスリム王岱輿（1590年頃－1657年頃）『正教真詮』人品にも「人極原一人，夫婦為二人。一人者人也，二人者仁也。是故三綱五常，君臣父子，莫不由夫婦之仁而立也」とあり，君臣，父子の関係も夫婦の仁愛によって立つことが述べられている。夫婦関係を五倫の先頭におくかんがえかたは劉智固有のものではないことがわかる。総綱はさらに夫婦につづく五倫についてつぎのように述べる。

有夫婦，而後有上下。在家為父子，在国為君臣。有上下，而後有比肩。同出為兄弟，別

氏為朋友。人倫之要，五者備矣<sup>11)</sup>。

夫婦があつて、それから上下関係ができる。家にあつては父子であり、国にあつては君臣である。上下関係があつて、それから横並びの関係ができる。家を同じくするものとしては兄弟であり、別にするものとしては朋友である。人倫の枢要部分はこの五つにつきる。

夫婦のあとに上下関係が生じ、それから水平関係できる。それぞれの関係を内から外へと記述した順序が「夫婦→父子→君臣→兄弟→朋友」という順である。いっぽう、夫婦以降の順序については他のかんがえかたもあり、たとえば馬注(1640年頃-1711年頃)は「於是有男女而後有夫婦，有夫婦而後有父子，有父子而後有兄弟，有兄弟而後有君臣，有君臣而後有朋友」(『清真指南』巻七・独慈)と述べていて、これによれば「夫婦→父子→兄弟→君臣→朋友」となる。発生学的な視点を徹底させ、そのうえに社会的関係を接続させている。ともあれ、夫婦を五倫の筆頭におくかんがえかたはムスリムのあいだで共有されていたといえよう。

## 2-2 夫婦関係を重視する中国伝統

夫婦関係を人倫の筆頭にもつてきて、つぎに父子関係をおく思想は中国の伝統にも存在する。たとえば『五倫書』夫婦之道にも引用されている『礼記』昏義篇にはつぎのようにある。【 】内は『五倫書』では省略されている。

敬慎，重正して後に之れに親しむは礼の大体にして，而して男女の別を成し，夫婦の義を立つる所以なり。男女に別有りて後に夫婦に義有り。【夫婦に義有りて後に父子に親有り。父子に親有りて後に君臣に正有り。故に曰く，昏礼なる者は礼の本なりと。】

「夫婦→父子→君臣」という流れがみてとれる。君臣関係，父子関係を基礎づけるのが夫婦関係であることからその夫婦関係を成立させる昏礼が礼の本源となる。『五倫書』ではそのことがわからないようになっている。また『礼記』郊特牲篇つぎの文章も『小学』明倫，

11) この文章にたいする注に「夫婦既立，子女生焉。子女生而上下之品判焉矣。父子者，家之上下也。君臣者，国之上下也。上下雖有家国之不同，而為尊為卑之理一也。上下既分，為上者一，為下者衆，而比肩之等列焉矣。兄弟，同出之比肩也。朋友，別出之比肩也。比肩雖有同異，而為長為幼之義一也。人倫之礼，本乎三，而尽乎五。三者，男女也，尊卑也，長幼也。五則君臣，父子，夫婦，昆弟，朋友也。五不外於三，而三則約乎五之義。三不外於五，而五則統乎三之名。名義立而道尽，人倫之要，無余蘊矣」とある。

『五倫書』夫婦之道にも引用されている。ただし『小学』明倫は（ ）内を省略し、『五倫書』夫婦之道は【 】内を省略している。

【(天地合して後に万物興こる。)夫れ昏礼は万世の始めなり。……】男子親迎するに、男、女に先んずるは、剛柔の義なり。天は地に先んじ、君は臣に先んず。其の義は一なり。摯を執りて以て相い見ゆるは、敬して別なるを章らかにするなり。男女に別有り、然る後に父子親しむ。父子親しみて、然る後に義生ず。義生じて、然る後に礼作る。礼作りて、然る後に万物安んず。別無く、義無きは禽獣の道なり。

「夫婦→父子」の関係がみえる。したがってさきの『五倫書』が引く昏義篇ではこの「夫婦→父子」の流れがわからなかったが、この郊特牲篇の引用で知ることができる。したがって『五倫書』が意図的に夫婦→父子関係を省略したわけではない。ただし、さらに「夫婦→父子→君臣」とつづいていく昏義篇の説は『五倫書』からはわからないし、『小学』では引用すらされていない。君臣関係が父子関係さらには夫婦関係に基礎づけられるとする説はやはり受け入れられがたかったのではないだろうか。

そのことと関連して注意したいのは、この郊特牲では、天地が合してから万物が生じることと夫婦が誕生することで人が生まれることがパラレルの関係であることを言明している。けれども『小学』は（ ）内を、さらに『五倫書』は【 】内を省略することで、その意義が不明瞭になってしまっていることである。あるいは、夫婦を天地になぞらえると、そのあとに述べられる「天は地に先んじ、君は臣に先んず」との整合性がいまひとつわかりづらくなってしまっているので削除したのではないか。とするならば、夫婦関係を後景化するための削除ともかんがえられる。この問題は君臣関係とのかかわりを考慮にいれる必要のない状況下では生じない。たとえば『小学』嘉言が引用する『顔氏家訓』兄弟篇の文章はつぎのようにいう。

夫れ人民有りて後に夫婦有り。夫婦有りて後に父子有り。父子有りて後に兄弟有り。一家の親は此の三者なる而已矣。茲れ自り以て往きて九族に至るに、皆な三親に本づく。故に人倫に於いて重しと為すなり。

「一家」の内部に限定するのであれば、「夫婦→父子→兄弟」という、奇しくも先述の『清真指南』とおなじ流れが見いだせるのである。

そもそも夫婦の男女関係から世界の成り立ちを説明していく強力な伝統的言説が中国にはある。『周易』である。『五倫書』夫婦之道・嘉言の冒頭に序卦伝の「夫婦之道不可以不久也、故受之以恆」という恒卦の説明が引用されていたが、この部分だけでは恒卦の意義は伝



わらない。『五倫書』が引用した文は以下のような記述の結論部分である。

天地有りて然る後に万物有り、万物有りて然る後に男女有り、男女有りて然る後に夫婦有り、夫婦有りて然る後に父子有り、父子有りて然る後に君臣有り、君臣有りて然る後に上下有り、上下有りて然る後に礼義、錯く所有り。夫婦の道、以て久しくせざる可からざるなり。故に之れを受くるに「恆」を以てす。(『周易』序卦伝)

夫婦の道が永遠に続かなければならないのは、夫婦関係から、父子、君臣、上下の関係そして「礼義」つまり制度(礼)と人が実践すべき正しい道(義)が生まれるからである。『周易』は上経と下経にわかれるが、上経は乾卦、坤卦つまり天地からはじまるのにたいし、下経は咸卦からはじまる。咸卦は夫婦をあらわすとされていて、この序卦伝は咸卦のつぎに恒卦が順番としておかれている理由を説明している。程頤『伊川易伝』に「天地は万物の本、夫婦は人倫の始めなり。上経は乾坤を首とし、下経は咸を首として継ぐに恒を以てする所以なり」というがごとくである<sup>12)</sup>。そして「夫婦→父子→君臣」という順序は先述の『天方典礼』巻10・総綱の順に似る。

よく知られるように『周易』の生成論には2つの系統がある。1つは『周易』繫辭伝にみえる万物生成論であって、太極という宇宙の根源から両儀→四象→八卦という順に生成していく説である。それにたいして、『周易』説卦伝でいわれるのが人間にフォーカスをあてた生成論であり、

乾は天なり。故に父と称す。坤は地なり。故に母と称す。震は一索して男を得、故に之れを長男と謂う。巽は一索して女を得、故に之れを長女と謂う。坎は再索して男を得、故に之れを中男と謂う。離は再索して女を得、故に之れを中女と謂う。艮は三索して男を得、故に之れを少男と謂う。兌は三索して女を得、故に之れを少女と謂う。

12) この『周易』の構成から想起されるのは馬安礼(1820年-1899年)が編纂した『真詮要録』である。本書は王岱輿『正教真詮』の要録であるが、馬安礼が独自に書き加えた箇所がままあり、また構成を大胆に変更している。『真詮要録』は上下巻にわかれるが、上巻は真道篇と名づけられ、真一章というアッターについての章から始まるのにたいし、下巻は人倫篇と名づけられ、最初の章は夫婦章(目録ではそうになっているが、実際の本文ではその前の「真功篇」から下巻ははじまっていたのであろう)。この章の内容は『正教真詮』にはなく、馬安礼が作成したものである。また『真詮要録』の人倫篇はつづく至孝章、君長章、友道章で構成されている。



というように父と母から子どもが生まれていくさまをえがく。したがって『小学』や『五倫書』といった五倫を総体的に議論する書では夫婦関係が相対的に軽く扱われたりもするが、逆に夫婦関係を重視する文脈も存在するわけである。

### 2-3 天理流行としての五倫

さて『天方典礼』巻10の総綱はつづけて、

夫婦，生人之本也。父子，尊卑之本也。君臣，治道之本也。兄弟，親愛之本也。朋友，成徳之本也。修此，而後人道尽。

と述べて終わり，ついで「夫道」そして「婦道」とつづく。「夫道」「婦道」の検討はあらためておこなうことにし，本稿は総綱の最後に付された注釈について言及して擱筆したい。総綱の最後の一文「これを修めて後，人道尽く」にたいしてつぎのような注釈がある。

五倫之序，天理之自然也。五倫之道，天理自然而流行者也。五倫之理，天理流行而無所不包，無所不貫者也。故其理該万理，事該万事。聖人慮人不能全此五倫，因制為典礼，頒行天下後世。使人各因其性之所本有以尽其分之所当然，斯不愧人為万物之靈也。

五倫の順序は天理のおのずからそうなるものである。五倫の道は天理のおのずからそうなるものが行われゆくものである。五倫の理（行動準則）は天理が行われゆき，包含しないことはなく，貫かないことはないものである。したがって五倫の理のなかにはあらゆる理が含まれ，五倫のなすべき事柄にはあらゆるなすべき事柄が包括される。聖人は人々がこの五倫を全うすることができないことを心配して，それぞれの定めにしたがって典礼をつくり，天下のために後世のために発布した。それは人それぞれがもともと持っている性にしたがって，その人の分に対応したそうすべき準則を欠けることなく実践させ，万物の靈である人として恥ずかしくないようにさせるためである。

まず，五倫の順序つまり総綱が述べた「夫婦，父子，君臣，兄弟，朋友」という順序は天理であり，おのずからそうなっているのだという。『小学』や『五倫詩』『五倫書』の系譜にあって，夫婦を先頭におくこの主張はやはり強いものであるとかがえたい。そのうえで注視したいのは，この注釈における朱子学的伝統的言いまわしである。「天理流行」は朱熹が性や理について議論する際によく使われるタームである<sup>13)</sup>。木下氏によるならば「天理」とは

13) 木下，前掲書，138ページ，164ページ。

「天命」さらには「天令」であり、「天」が降し伝える天の意思そのものであり、その意思に非主体的にしたがうのではなく、その意思が発出するメカニズム（＝理）を本人自身のメカニズム（＝性即理）として、「心」のはたらきとすること<sup>14)</sup>。「流行」とはその「天理」が行われゆくこと<sup>15)</sup>。ここで「天」をアッラーの意味でとる必要はおそらくない<sup>16)</sup>。漢語として熟した「天理」の文脈にそって使用しているからである。また「五倫之道」といういい方は、そもそも五倫の出典である『孟子』滕文公上の「人之有道也，飽食，煖衣，逸居而無教，則近於禽獸。聖人有憂之，使契為司徒，教以人倫。父子有親，君臣有義，夫婦有別，長幼有序，朋友有信」の冒頭を想起させ、その該当箇所にたいする朱熹の注（『孟子集注』）にはつぎのようにある。

人之有道，言其皆有秉彝之性也。然無教則亦放逸怠惰而失之，故聖人設官而教以人倫，亦因其固有者而道之耳。

『孟子』の本文に「人之有道」とあるが、それは『詩経』にいう「秉彝（天から与えられた不変の道を守ること）」という性を人はもっていることをいっているのである。だが教えがなければ放逸，怠惰になってその性を失ってしまう。だから聖人は官吏を設けて人倫を教えたのだが、それは人がもともと持っているものにもとづいて導いただけにすぎない。

五倫は「秉彝之性」であり「固有」つまり本来的に人びとがもっているものであって、外在的に教えるものではなく、その本来もっているものを導くだけにすぎない。さきの総綱の注釈「使人各因其性之所本有以尽其分之所当然」とおなじ主旨である。この一文の「本有……当然」も朱熹の『大学章句』にみえる語であり、『大学』伝8章に、人は親愛、<sup>いやしみにくむ</sup>賤惡、畏敬、<sup>あわれむ</sup>哀矜、<sup>おこる</sup>傲惰の5つの感情において偏ってしまう、とあり、これらにたいして『大学章句』では「五者，在人本有当然之則」と注する。「人をして各おの其の性の本有する所に因りて，以て其の分の当然とする所を尽くさしむ」つまり人が本来的にもっている性に依拠しつつ、それぞれの人が、たとえば親として、子として、あるいは朋友として……変化するそれぞれの立場（分）において、その立場に応じたそうすべき準則を尽くさせるべく、礼がつくられた、ということになる。

14) 木下，前掲書，142-144ページ。

15) 木下，前掲書，137ページ。

16) 漢語による単語をイスラームのタームに1対1で互換してしまう弊害については、いずれ公刊されるであろう劉智『天方性理』の訳注で詳説される。

付記 本稿はJSPS科学研究費「近世中国におけるムスリムの問答体文献の研究」(課題番号15K02037研究代表者・佐藤実)の助成を受けたものである。